

第十九回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

今道 友信 著『美の存立と生成』（2006年7月29日 ピナケス出版 刊）

今道 友信 いまみち とものぶ 大正11年（1922）生まれ。東京都出身。専攻は、哲学、美学、倫理学。旧制第一高等学校文科卒業。東京大学文学部卒業。同大学院哲学科特別研究生。文学博士（東京大学）。紫綬褒章受章。東京大学文学部名誉教授、英知大学名誉教授（受賞時）。現在は哲学美学比較研究国際センター所長。著作は、『同一性の自己塑性』、『美の位相と藝術』、『東洋の美学』、『ダンテ『神曲』講義』、註解書に、『アリストテレス全集17 詩学』、他多数ある。

受賞のことば

和辻哲郎先生は私の恩師の一人である。私が東大哲学科に入学したのは一九四五年の春、敗戦直前のことであった。先生は隣の倫理学研究室の主任教授で、私には特別目をかけて下さり、当時は手にし難かった貴重な洋書も貸して下さった。私を導いて下さった方の賞をいただくなど、思いもかけなかった光栄であるが、それが御恩返しになるのなら、こんな大きな喜びは稀なことである。私は今や本来なら功成り名遂げてよい年齢に達した老学徒であるが、それが年齢だけのことで、未だに学成らず、牛歩の思索を刻む日々であるから、今後を励ましていただく意味で、慄えるような思いで、この光栄を戴くことになった。幸い今も思い進めては書き、書き上げては思い直しを反復する思索中の課題があるので、その完成に向かい、この名誉に力づけていただく思いである。より秀れた人びとに恥じる思いもあるが、選んで下さった方々に感謝申し上げ、御遺族には先生の学恩を新たに感謝申し上げたい。

《選考委員評》

坂部 恵

本書は、著者が先立って刊行された『美の位相と藝術』（一九六八年、増補版七一年）を承けて、この間四十年近くの業績を集成、満を持して美学の体系的思索を世に問うべく編まれたものである。著者今道氏は、わが国の哲学・美学研究の長老であられ、戦後の社会・経済の混乱がまだ消えやらぬ時期にドイツに留学、その後教育活動を含めて彼の地での滞在も長く、つねに欧米の第一線の学者たちとの切磋琢磨をつづけ、欧米での知名度が日本でのそれを上回るほどの方である。

哲学は非常に多くのことを約束しているが、自分は結局そこからあまりうるところはなかった。文献学（Philologie）は何も約束してはいないが、今となってみれば自分は実に多くのものをそこから学ぶことができた、という師ケーベルのことばを和辻哲郎は好んで引いたが、このことばの真意は、哲学を貶めることではない。むしろ、かえって文献学的研究の裏打ちのない哲学の不毛を衝き、文献学的研究の基礎の上に人文主義^{フマニスムス}の香り高い哲学が花開くべきことを示唆したことばといえるだろう。今道氏は、アリストテレスの『マグナ・モラリア』の写本校訂にまで立ち入った精緻な文献学的研究や、あるいはアリストテレス全集中の『詩学』訳の龐大かつ周到な注解などで、文献学者としての傑出した力を若年の頃から示しておられる。また、比較的近くには詳細な文献考証を含む『東洋の美学』（一九八〇年）、『ダンテ『神曲』講義』（二〇〇二年）があり、また今回の受賞作と対をなす歴史的文献学的研究の刊行をも予定されている由である。

今回の受賞作の背後には、今道氏の一貫して絶え間のない文献学的修養がひかえている。「解釈」、「想像力」等をめぐる氏の思索は、つねに文献学的研究をとおして洞見された東西文化の霊性・精神性の伝統とあい涉水り、変貌した現代世界との接点をさぐるべく着実に進められる。渡辺一夫、井筒俊彦らを継ぐ人文主義的研究の偉業といえよう。

関根 清三

今年の受賞作は、日本の代表的な美学者・哲学者のお一人として、八十四歳になられる今日まで、独自の思索を力強く進め、国際的な活躍を続けておられる、今道友信氏の最新著である。『同一性の自己塑性』と並ぶ三十余年前の主著『美の位相と藝術』の続編として、美についての思索がここに完結する。本書の独創的な達成は、大きな柱として次の四点が挙げられる。

- 一. 旧著『美の位相と藝術』では、美は善や真と並ぶ、存在論的範疇として語られていたけれども、本書では美を存在の上に位置づける。
- 二. 旧著では、美の諸位相が主観的意識の側で捉えられたが、本書では主観的意識に働きかける対象的存在者の生成の側から捉え直される。そこで「創造」が最大の課題とされ、それを生み出す「想像力」が悟性と理性の間に位置する能力として重視される。
- 三. 芸術作品の解釈は、史的な分析や解説の先にあり、更には作者の意向とも無縁であって、作品の超越指標を手がかりに、理念に向かって登高し行く思索として別扱される。
- 四. 現代社会を技術連関の自律的運動から見直す著者は、形相が失権し風姿を重視する社会と捉える。そこからやまと言葉の伝統に遡って「身」の詩学を導出し、世界戦場化に狂奔する世情に対して、世界美化に身を尽くそうとする実践美学を提唱する。

このような創見に富む思索と骨太な論理を、古今東西の古典や概念と縦横に渡り合いながら、独自の緊迫した格調高い日本語によって彫琢し技いた、金字塔である。

かつて和辻哲郎は、哲学は多くを約束しつつ少なくしか与えてくれなかったが、文献学は何も約束しないが多くを与えてくれたという、恩師・ケーベル博士の言葉を想起しつつ、『ホメロス批判』を上梓した。その和辻に若き日、君は哲学に偏りすぎず文献学もやるならば大成すると言われた今道氏は、文献学も哲学も共によくする豊かな才能に恵まれつつも（前者についてはアリストテレス『詩学』訳注に結晶している）、二代にわたる師の言葉に抗して、敢えて訓詁注釈の道を制限して創造的な純粹思索の道を突き進まれた。その最も良質な成果がここに結実し、哲学は多くを約束しつつ、しかも多くを与えることができることを、身を賭して証されたことに、感動するのである。

黒住 真

最近の優れた学術書は、感性あるいは美学につながるものが多い。人の生き方をとらえる際、従来は、ただ理性を本体としてみる傾向があった。これに対して、美や感性をめぐる人の学びをとらえることは、それとはやや違った、美しさや芸術、想像や身をもった人の働き、その姿や方向を私たちに具体的に示唆する。ただ、それが、人において、そもそも、どんな時処に在り、どんな可能性や問題をもって創造・生成され、表象され形づくられるのか。その根本的な在り方は、重要だが簡単ではない。美に興味をもち共感する人が増えても、その根本的な大きな問い、それに深く出会い語ってくれる人も、またそれを本当に聞く人も、実は意外に少ないのではないか。

しかし、今道友信氏は、その本当のところから、私たちに何かを伝えてくれる。何時もそうだったし本書もまたそうである。別言すれば、人における美の「道」を氏は示してくれる。多くの哲学・芸術・諸宗教のさまざまな人々・物事が、氏によって開かれた時空に位置づけられ、私たちに更に伝わってくる。そこには、狭義の学術や学会・個別研究といったものとはまた違った、大きな広がりや深さ・感動がある。そこに当然、本書自身の美しさがある。

伝えられるそのものは、いわば西洋のみならず、東洋・中国日本、それらの古典とも共鳴するものである。そのことは近現代人の通常とされるものや身心を越えた、いわば「彼方」からの訪れでもある。また、それは美学のみならず倫理学に繋がり、永遠にも、縁や徳にも、悪や罪などにさえ人を出会わせている。そこに「空」とはまた違った人格性がある。思えば、和辻哲郎に直接よく出会った今道氏から、さらにその先の芸術や倫理が説き起こされ、それが私たちに伝わってくるのだろう。読者は各自多くのものを本書および今道氏の作品からいただくことが出来る。それは大きな「ひと」「もの」「こと」というほかはない。